

ご挨拶

東京学芸大学は1949年に新制の大学として創立されました。そして、この3月には千人を超える60期生が卒業しました。生物科同窓会に今年新たに加わった卒業生は40名、そして全体の会員数は2294名となりました。この数は、大学全体の卒業生から見れば、たかだか4%程度です。しかし、1期生から60期生までの会員がいる同窓会は、大学内には生物科同窓会と、あと3つの同窓会があるだけなのです。

60年の歳月を経て世の中は大きく変わりました。生物に関わる事象も然り。環境問題、絶滅生物、バイオテクノロジー、外来生物、ライフサイエンス、生命倫理など、枚挙に暇がありません。そして、ダイナミックな変容を見せる生物学の世界に呼応するかのよう、生物分野の教育内容も変化してきました。

新学習指導要領では生物分野の内容も大きく変わったことはご承知の通りです。復活した内容、新しく加わった内容、そして、なおかつ削られたままの内容と様々です。本当はどれも大切な生き物の話なのですが、限られた授業時間内に全部を収めることは不可能です。かといって、全ての大人が（教員が）子どもに知らんふりをするわけにもいきません。

せめて4%が頑張ることで、これからの困難な時代に対応できる柔軟性のある子どもを育てていきたいものです。その皆さんのために、大学の教員はバックアップを惜しみません。何かあれば、母校を振り返ってください。そのための生物科同窓会であることを願ってやみません。

（平成24年度 生物学教室・生命科学分野主任
真山茂樹）

◆生物科同窓会「企画講演」のお知らせ

今年も同窓会総会に先立って、恒例の企画講演会を下記の通り開催いたします。当日は学園祭である「小金井祭」の期間中で、大学企画の「ホームカミングデー」にあたります。本年の講演者は昨年本学に着任されました堂園いくみ先生です。本講演は一般公開です。多くの同窓生、教師を目指す学生諸君のご参加をお待ちしております。

花と昆虫の織りなす世界

講師 准教授 堂園 いくみ(Ikumi DOHZONO) 先生
所属 東京学芸大学 自然科学系 環境科学分野
日時 平成24年11月24日(土) 13:00~13:50
場所 東京学芸大学自然科学系研究棟1号館
(旧自然館) 2階 生物学第一実験室 (CN206室)

美しく色とりどりに咲く花は、私たちの心を和ませ豊かにしてくれます。

しかし、植物は私たちのために花を咲かせているわけではありません。動くことのできない植物は、次世代のタネをつくるために、花粉の運搬を主に昆虫に頼っています。いかに効率良く花粉を運んでもらい、たくさんのタネを残すのか—美しい色や形には巧妙なしくみが隠されています。今回は、様々な植物の“巧妙なしくみ”を紹介しながら、植物の花の進化について考えてみたいと思います。

ご経歴：

東京都立大学理学部生物学科卒業、同大学大学院理学研究科生物学専攻・博士課程修了（2000年）、博士（理学）
高校非常勤、東北大学、国立環境研究所、神戸大学を経て2011年10月、東京学芸大学へ赴任
ご専門：植物生態学

◆平成24年度 生物科同窓会 総会のお知らせ

平成24年度生物科同窓会総会を、上記「企画講演会」の後に同会場で開催いたします。下記のように、重要な議題がありますので、多くの会員のご出席をお願いいたします。

日時 平成24年11月24日(土)
14:00~15:00

場所 東京学芸大学自然科学系研究棟1号館
(旧自然館) 2階 生物学第一実験室 (CN206室)

議題

- ① 平成23年度決算報告
- ② 平成24年度会計中間報告
- ③ 平成25年度事業計画
(企画講演会、自然観察会など) について
- ④ 会費の納入率を上げる方策について
- ⑤ 「生物科同窓会ニュース」紙面の内容と充実について
- ⑥ 同窓会の今後の在り方について
- ⑦ その他
(上記の「企画講演会」と同じ会場です。会員の方は講演後そのままお残りください。)

◆生物科紙面同窓会

生物科同窓生の「今」の声をお届けします。同窓生と言えども、なかなか会う機会がないのが実情です。この紙面同窓会で情報交換が行なわれ、同窓の繋がりがますます深まれば幸いです。今回は昨年原稿を依頼しなかった同窓生で、平成19年度までの会費を納められている会員に依頼しました。その結果、15名の投稿がありましたので紹介いたします。

【3期】

●昭和26年から2年間学大大泉分校で過ごし、植物を小林万寿男先生、動物を井上巖先生から学びました。三宝寺池の動植物観察や、霧ヶ峰高原の散策は忘れられない思い出です。大石良樹部長等生物部員が植物学の牧野富太郎先生のお宅に伺い、植物採集、分類の話の直接聞いたのは貴重な体験でした。

荒川の小学校を定年退職した後は川口市の公民館で、健康のために太極拳を楽しんでおります。

N. K. 昭和30年卒

【6期】

●同窓会ニュース等、ご連絡ありがとうございます。私は大泉校舎最後の年・昭和28年入学、小林先生に野外で植物観察指導をいただきました。その夏、病欠休学（半年）一年生。小金井校舎で2年間学びました。3・4年は目黒。現在も、多摩地区の自然観察を趣味で続けています。この8月30日は御岳山ヘレンゲショウマの撮影に同級生と行きました。野草の女王様に出会った気分です。

西多摩・檜原の尾根の春でも貴重な野草の花の観察を楽しんでいます。

T. N. 昭和33年卒

【9期】

●昭和32年に入学、当時学芸大農学に事務局があった東京腊葉会に入る。生物科のヒトも大勢採集会に参加していた。以来、植物観察を続けている。この経験は教職に大変役立った。現在、腊葉会の事務局の一員で会員減少と高齢化に悩んでいる。小中学校の先生方、一緒に出かけてみませんか。

定年退職・嘱託を終えて夏のヒマラヤ行6回、同行の友人とヒマラヤ展をやった。今年はいける人が少なく断念した。来年は是非行きたいと願っている。

T. K. 昭和36年卒

【11期】

●今年から「ヤマネの森の生態調査」に関わり、昆虫調査をすることになった。月に2～6日は道のない山の中を歩き回ったり、トラップをかけたりして採集に没頭している。疲れて休んだ時には、大学時代に川崎次男先生を先頭に山の中を歩き回り、採集しまくったことを懐かしく思いだしている。採集は楽しいが、大変なのは標本作成と分類。若い頃は夜中

まで小さな虫と向き合ってもなんともなかったのだが、今では老眼鏡をかけていても目が疲れ、1日5時間くらいが限界になった。標本になれない昆虫がたまるばかりではあるが、焦らずやれるところまで、と頑張っている。

R. A. 昭和38年卒

●僅かばかりの水田で米づくりをしています。今年の稲刈りは8月10日でした。米づくりで採算は合いませんが、水田を放置するわけにもいかず、米づくりをしております。昔は稲刈りの後、すぐに耕運をして稲の苗を植えておりました、つまり米の2期作でした、現在は米あまりで作ってはいけな時代となりました。

加齢と共に稲作の継続もそろそろ考える必要が出てきました。しかしその前に、引き継いでおきたいのは東京学芸大学高知県支部の仕事です。若い人達に引き継いでもらいたくて現在作業中です。また、母の介護にもエネルギーを費やしています。

K. Y. 昭和38年卒

【18期】

●小学校の教員を定年退職し5年たちます。

老母の世話を中心とした生活になったため、これといった事ができないのですが、最後の勤務校に行事のたびに顔出ししたり、健康や食物に関する講演会・講習会に参加したりしています。

テレビや新聞で学校関連の話題が載るのを見るにつけ、教育現場の大変さを感じる毎日です。

M. T. 昭和45年卒

【19期】

●八月末の今、庭には朝顔、夕暮れには大輪の白い夜顔が咲くのを見て暮らしています。退職から三年半がたち、楽しみにしていた旅行や語学は中断しており、孫の育児を手伝って気忙しく過ごしております。ただ、二年余り大正琴を習い続けていて、ピアノとのアンサンブルということで、普段はあまりなじみのないクラシックやオペラの曲にも挑戦し、発表会に向けて悪戦苦闘しているこの頃です。

N. O. 平成46年卒

【23期】

●2年前、この「紙面同窓会」に記事を書かせていただいたことがきっかけで、卒業以来35年振りに、懐かしい友との再会が果たせました。会いたいと願いつつなかなか連絡がとれず、ずっと胸につかえていました。久しぶりの懐かしい顔に出会ったとたん、胸に込みあがるものがありました。

今年度でいよいよ定年となりますが、多くの素晴らしい方々に出会えたことが一番の財産です。もうわずかですが、自分らしく最後まで務めたいと思います。

K. N. 昭和51年卒

【27期】

●昨年教員免許更新を終え、定年まであと少しになりました。年を重ねるごとに気力・体力が落ち、教員生活に疲れを感じています。小学校の教科の中でやはり好きな教科は何と言っても理科です。授業では、一番力が入ります。自然の素晴らしさや生命の不思議さ等を少しでも子どもたちが体感できるように心がけてやっています。でも授業はなかなか難しいですね。一人でも多くの理科大好きの子どもの育てたいと思っています。

J. M. 昭和54年卒」

【30期】

●現在、群馬県立万場高等学校長として勤務しております。山の中（日航機の御巣鷹の尾根は近くです）の小さな学校（1学年2学級）ですが、ここには教育の原点があります。6月のインターハイ予選では、2人きりのバレーボール部員のために、4人の友人が助っ人参加し、3年間で初めて公式戦に出場するという出来事もありました。都会の進学校やスポーツ強豪校にはない、別の価値観に改めて気づくことができる学校です。

S. S. 昭和57年卒」

【34期】

●私にとって、大学の4年間は刺激の連続でした。まず、大都会東京に一人暮らし。自炊。サークルでの旅行（サイクリング同好会にて）。研究室。駅で寝ていて追い出されたこともありました。今は、富山県で教員をしています。学芸大学出身の人が少なく（芸大と間違われることも…）親戚のような親しみを感じます。そして、今でも4年生で再々履修した英語のテストの夢でうなされるのです。

E. N. 昭和61年卒」

【38期】

●学芸大で6年間も学んだにも関わらず、教育とは無

縁な農林水産行政に携わっており、この春から札幌に居を移して、主に種馬鈴しょの検疫をやっています。北海道には馬鈴しょに被害を与えるシストセンチュウが跋扈しているので、犀川研でとった杵柄で、このセンチュウの寄生菌を見つけないかと密かに狙っています。（動植物検疫にご協力を！）

Y. A. 平成2年卒」

【42期】

●学大時代は、自分はどのようにこう人づきあいが苦手なんだろう、とよく思っていました。社会に出て、今も相変わらずです。ただ、今は周りの多くの人たちに支えられているありがたさを実感し、感謝する毎日です。

皆様もどうぞお元気で活躍ください。

M. K. 平成6年卒」

【47期】

●現在、栃木県内の私立大学に勤務しております。高大連携やオープンキャンパスでお会いする先生やご父兄の中には学芸大の卒業生という方もいらっしゃって、思いがけない出会いにうれしさと同時に、身が引き締まる思いもあります。

このような出会いが、今後も続いて行くことを願っております。宇都宮にいらしたときには、是非お立ち寄りください。

M. A. 平成11年卒」

【50期】

●地元栃木に戻り、教員として10年が経過しました。平成22年4月より、宇都宮大学教育学部附属小学校に勤務し、理科を中心に教えています。最近、生物教材を用いた授業に力を入れています。子どもたちに、学問としての生物の魅力を伝えられるように教材研究に取り組んでいます。大学の時に学んだことや体験したことが、自分の教員としての中心になっていると感じる日々です。

Y. H. 平成14年卒」

◆会員の広場

同窓生のご活躍などを紹介する欄を新たに設けました。活躍した同窓生の情報をお知らせください。

今回は最近出版された同窓生の著書を紹介します。

【書評】

著者 坂井 悦子

「目からウロコの中学校理科指導書」
～ちょっとした工夫で授業は変わる～

明治図書出版（株）1900円（税抜き）A5判、141頁、2010年12月初版、2012年初版第4刷版。

著者の旧姓は佐野さんで、東京学芸大学の中等教育教員養成課程（理科専攻）に在籍され、生物学科第20期卒業生（昭和47年卒業）です。東京都の公立

中学校教諭を37年間務められ2年程前に退職されました。その間、東京都教員研究生として東京学芸大学に派遣されました。また、平成14年版から啓林館中学理科教科書の執筆をされ、編集委員を務められています。

この本には、著者が長年勤められた公立中学校の一教員として、理科の授業をどう組み立てていけば生徒は乗



ってくるか、与えた科学の基礎の定着が図られるか、有効な話は何か、どこにどの実験を入れたら分かりやすくなるか、などを考えながら試行錯誤を繰り返されてきた授業の実践例が書かれています。第1章「授業創りに参考となることを」、第2章「簡単に生徒の食いつきのよい実験観察を」、第3章「理解を助ける指導法の工夫や教材・教具を」から構成され、各章で著者の工夫が随所に示されています。第1章では、理科の授業でまず頭に置くべきこと、それらの具体的な実践例などについて、第2・3章では、第1分野（物理・化学）、第2分野（生物・地学）の工夫された種々の実験観察やその指導法が図や写真で示されています。

大学の専門の先生が書かれた理科教育学の本とは異なり、現場の教師が生徒の反応など、実際の体験に基づいて書かれたもので、教員養成学部の理科の学生や、教育現場で理科の授業で悩んでいる若い教師、更にはベテランの教師にも役立つ大変貴重でユニークな本です。

（東京学芸大学名誉教授 岡崎 恵視）

【書評】

著者 松田 邦雄

写真集 「夢追蝶」

自費出版：ヒロ企画 1500円 A4判、60頁

2011年1月初版、2012年第2刷

本会会員の松田邦雄氏（4期）が写真集「夢追蝶」を出版された（2011年1月）。副題に「日本産蝶生態写真 255種撮影成就」とある。もう何年も前になるが、松田先生から「日本産チョウ全種の生態写真を撮るのが目標」と伺った。勿論、これまでに日本産チョウ類の写真集は多く出版されているが、それは多くの撮影者の写真を集めたものである。1人ですべてとは、これは大変なことだと思ったし、正直なところ半信半疑でもあった。しか



し、その後、お会いするたびに「今年の目標はこれとこれ」から次第に「後、これとこれだけ」に変わり、ついに副題にあるように「成就」となった。

カメラを持って近づけばチョウは逃げる。捕虫網で採集する方がよっぽど楽である。どこそこに、あるチョウがいると分っていても行けば見つかるわけではない。あるとき、四方津（山梨県）の御前山にクロツバメシジミ（これ、なかなかの珍蝶）がいると聞いて出かけたが、場所がわからない。たまたま、通りかかった地元の愛好者に、「ここではなく、大月の岩殿山の登山口の右手にある民家の裏の小さな畑の中の大きな岩に食草のツメレンゲが生えていて、そこに行けば見られる」と教えてもらった。こうなると最早埋蔵金探しの世界である。はたして、現地に着くと件の岩の廻りを小さな黒いチョウが飛んでいた。チョウの種類によってはこのくらいの緻密な情報が無いと出会えない種もある。



本書はこのような種や高山、離島のチョウも含めて、すべてを1人で撮影されたスゴイ本なのである。

（千葉県立保健医療大学教授 橋本健一）

本書は自費出版のため、一般の書店では入手できません。ご希望の方は住所、氏名を下記までご連絡いただければ「申込書」をお送りいたします。

記

氏名： 青木 良 宛

電話： 042-575-9532

Eメール：ryoaoki@mse.biglobe.ne.jp

◆平成23年度 企画講演会報告

昨年、生物科同窓会総会に先だって開催された Ferjani Ali 先生の講演には同窓生、在校生が多数来場し、植物の葉の形態形成、遺伝子の働き等について興味深い話に耳を傾けていました。講演について編集委員がまとめました。

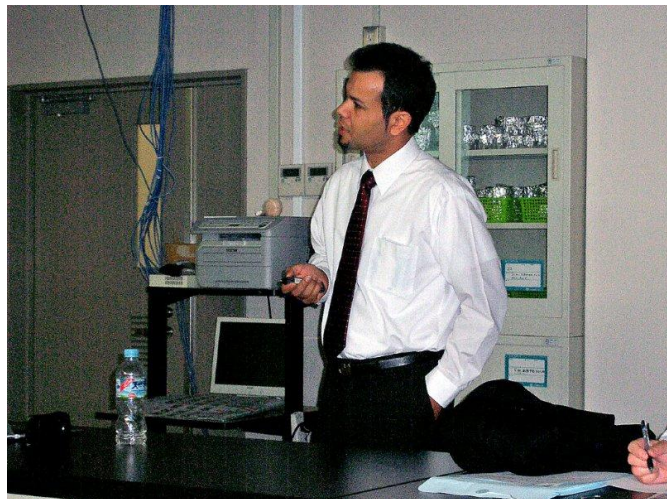
補償作用のしくみの解明は 葉のサイズ制御の理解への近道である

東京学芸大学 自然科学系 生命科学分野 助教 Ferjani Ali 先生

種子植物の地上部は、葉と茎とから成り立っています。葉は植物の基本形態のうち、最も重要な要素です。葉はどのような仕組みで形態を維持しているのでしょうか？

Ferjani Ali 先生はチュニジア共和国の“ Faculté des sciences de Tunis ”大学・理学部ご出身で、日本の総合研

究大学院大学において理学博士を取得されました。東京学芸大学へは4年前の2008年9月に着任されました。「環境問題の解決につながる活動をしたい、いつか砂漠を緑に変えたい」という夢を抱いて研究し、結婚式の翌日もサハラ砂漠にいたという熱心さ。現在、「遺伝子操作で何とかしたい」と高等植物の発生や成長について研究を進めておられます。



講演は前半・後半の二部に分けて行われました。

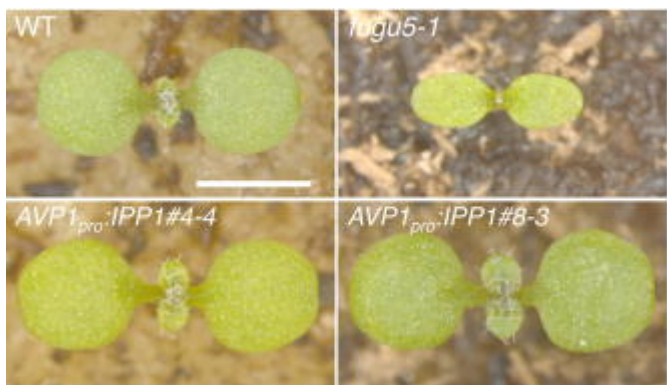
前半は「実験材料と *fugu* 変異体について」です。

標題の研究に使われたのはアブラナ科のシロイヌナズナという小さな植物です。ライフサイクルが短く、葉や花の構造が単純で、2001年に全ゲノムが解読・公開されるなど今まで多くの研究がなされ、研究環境が整ってきたことから、世界中の植物学者が注目しています。

葉は、茎の頂端にある分裂組織(メリステム)から生じます。葉の形成には2段階あります。葉身部分の細胞数が決定されるまでの期間は細胞増殖能が維持され、その後、増殖活性を失った細胞が急速に伸長し、最終的な細胞のサイズが決定されます。では、葉のサイズ/形はどのように制御されているのでしょうか？

古典的細胞説では、遺伝情報が細胞の形を決め、葉の形ができるまでとされてきましたが、現在では、葉のサイズは細胞のコミュニケーションを介して制御されていることが東大の塚谷先生他の研究により分かってきました。

ANGUSTIFOLIA (AN3) 遺伝子は、葉の細胞の増殖に重要なもので、その欠損は細胞不足をもたらします。*an3* 変異体と野生型とを比較してみると、植物体のサイズにさほど差はないのですが、変異体の細胞数は70%減少していま



す。しかし、細胞のサイズは160%に増加しています。これは、細胞数がある程度少なくなると体積を増やすという葉に特有な「補償作用」という現象が起きた結果です。葉のサイズ/形の制御システムを理解するうえでは、葉における「補償作用」の解明が重要なヒントになると考えられます。

an3 の他に新たに多数の変異体を単離し、その中から葉のサイズに異常を示す変異体を選び、補償作用を示す「*fugul* ~ *fugu5*」変異体を獲得しました。*fugu* 変異が細胞肥大をおこすので、捕まえると膨らむ「フグ」にちなんで名づけられました。

では、補償作用はいつ、どこで、どのように誘導されるのでしょうか？ 30日間、毎日サンプリングして柵状組織の細胞数とサイズを調査した結果、補償作用は(いつ)細胞分化の過程で誘導され、(どこで)有限成長を行う器官(葉、花弁及び子葉)で、(どのように)伸長活性の上昇及び伸長期間の延長化によって起こることが分かりました。



後半は「**FUGU5** の欠損とショ糖による表現型回復」についてです。

補償作用は *fugu5* 変異体(以後 *fugu5*)の子葉で特に強く表れます。野生型の子葉はうちわ型ですが、*fugu5* ではやや細長くなります。*fugu5* の細胞数は野生型の60%程度に減少しますが、細胞のサイズは野生型の~175%にもなっています。ショ糖を含んだMS培地で育てると、初めは野生型と *fugu5* との区別はつきませんでした。このことから、ピロリン酸分解酵素(**IPP1**)の機能が失われた *fugu5* が生活力を持つこと、また、ショ糖の存在下で表現型が回復することが分かりました。

ピロリン酸(以後 **PPi**)は動植物の様々な代謝反応の副産物として細胞内に蓄積します。しかし、毒性があるので、

←野生型(左上)、*fugu5-1* 変異体(右上)、パン酵母のPPi分解酵素を導入した *fugu5-1* 変異体(下段左右)、播種後一週間の芽生えの写真。正常な子葉は「うちわ型」(左上)の丸い形なのに対して、*fugu5-1* 変異体ではやや細長いかたちになる(右上)。酵母のPPi分解酵素を導入した株では、この子葉の形状は回復し、むしろ大きくなった(下段左右)。スケール:2mm

PPi 分解酵素で分解しています。植物では PPi 分解酵素は液胞膜に局在し、PPi を分解するはたらきと、液胞を酸性化するはたらきとの2つの機能を持っています。fugu5 に見られる補償作用は、PPi の分解酵素が持つ2つの機能のうちのどちらが損なわれたためなのでしょう？

そこで、パン酵母の細胞質型 PPi 分解酵素 (IPP1) に注目し、fugu5 に導入しました。IPP1 は PPi 分解のみの機能を持ち、液胞内の酸性化を行わない性質があります。興味深いことに、IPP1 遺伝子を導入した fugu5 は、完全に表現型を回復しました。このことから、植物が芽生えから成長する段階では、液胞の酸性化より PPi の除去そのものが重要であることが分かりました。

◆平成23年度生物科同窓会総会の報告

平成23 (2011) 年度総会が昨年11月5日 (土) 午後2時から東京学芸大学自然科学研究棟 (自然館) 2階生物学第一実験室で開催されました。そして、次の事項について審議され、承認もしくは議決されました。

- (1) 庶務報告
- (2) 会計報告 (22年度決算報告、23年度中間報告、会計監査報告)
- (3) 24年度予算案
- (4) 24年度活動計画 (特別企画講演会、自然観察会、会員名簿作成、会費徴収)
- (5) 同窓会規約改正
- (6) 同窓会ニュースの在り方
- (7) その他

これらのうち、(4) については、環境科学分野に新たに赴任された堂園 (どうぞの) いくみ先生に講演を依頼すること、自然観察会は講師に真山茂樹先

休眠から目覚めた種子は、脂質などの貯蔵物質からショ糖を作って発芽後の発育を支えます。しかし、fugu5 では、PPi が分解できずに蓄積し、濃度が高くなっているため貯蔵脂質に由来するショ糖の生合成が停止しています。この個体に外からショ糖を加えれば、正常に発育することになります。PPi を除去することとショ糖を加える事は同じことだったのです。

PPi の除去は植物の成長促進の効果もあり、バイオマスの増大などが期待されるだけでなく、PPi が毒であることを逆手にとって癌の治療への活用も考えられます。

(編集委員 青木 良)

生 (植物)、青木良先生 (昆虫) を講師に、平成24年5月19日 (土) に実施すること、会費徴収にはニュースNO. 12 (24年9月末日発行予定) と共に郵便振替用紙を同封すること、予算案には「ニュース編集経費」を項目として加えること、(5) については、従来の役員の名称を改め、幹事長→会長、書記→庶務とし、新たに副会長を設け、選出人数も書記2名→庶務若干名、編集員委員2名→若干名と改めること、従来の幹事各期2名の選出は有名無実のため廃止し、役員 (会長1名、副会長2名、会計2名、会計監査2名、庶務若干名、編集員委員若干名) で会を運営すること (詳細は最新の同窓会ホームページ

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~biology/seibutsuka/dosokai.htm>

の「生物科同窓会の規約改正」を参照下さい) などが決まりました。また新たな役員として、庶務に29期生石井雅幸氏、編集委員に32期生仁科りか氏が選任されました (それ以外の役員は上記ホームページ「同窓会役員」を参照のこと)。

◆自然観察会報告

恒例の「自然観察会」が本年5月19日 (土) 13:00~15:30に、青木 良先生 (11期生・東京農業大学非常勤講師、昆虫) と真山茂樹先生 (26期生・東京学芸大学教授、植物) が講師を担当され、「学芸の森探訪—植物・昆虫の知られざる世界—」と題して実施されました。今回も生命科学分野との共催でしたが、更に大学学修・キャリア支援プロジェクト「学芸カフェテリア」のメニューに取り上げていただき、学生の参加を広く呼びかけました。当日はこの学芸カフェテリアの事務局があるC棟前の広場に集合して、岡崎恵視同窓会会長 (13期生、東京学芸大学名誉教授) の挨拶の後、真山先生から、ご自身が作製された「学芸の森散策マップ vol.1」なる折りたたみ式のマップが参加者全員へ謹呈されました。このマップはキャンパスの地図と90種の植物の分布が番号で示され、各植物の写真とQRコードが載せてあり、このコードで携帯電話やスマートフォンから植物を調べることが出来るといった、新しいタイプの「植物図鑑」とも言えるものでした (興味ある方は真山先生に直接お問い合わせ下さい)。キャンパス



内を探索した後、今回は北側の「農園」まで足を延ばすことが出来ました。天候にも恵まれ晴天で、植物に集まる昆虫も多く、青木先生から昆虫名やその生態について詳しい解説があり、2時間半の観察会がアツという間に過ぎてしまいました。参加者は、生物科同窓会役員6名、本学学生5名、生物科同窓生3名、小金井市環境市民会議会員4名、小金井市民6名、教師1名、他大学1名 (総参加者26名) でした。

参加者からは下記のような感想が寄せられましたので、ご覧下さい。

キャンパス内 春の自然観察会 学芸の森探訪 ～植物・昆虫の知られざる世界～ についての感想

初めて学芸カフェテリアの活動に参加することになり、とても緊張していました。それに加えて集合時間に遅刻するという始末……。はじめのうち、僕は不安の色で心を染め上げながら、学芸の森探訪に参加していました。しかし、その不安は多くの驚きによって徐々に霧消していきました。まず、第一の驚きは、僕よりも年配者が多かったことです。学生向けの講座なので学生ばかりだろうと予想していたことを、良い意味で裏切られました。参加者には現職で教鞭を振っている方もおられました。先生になっても勉強される姿は、教職を目指している私にとって、教えられるものでした。また、今回の講座では、座学として詰め込むだけの勉強からは得られぬものを実感できたことも、忘れがたい経験でした。例えば、真山先生の授業でとり扱われたシロヤマブキ。雌蕊が四本あるので実が四つできる。字面を読むだけでは、とりわけ何かを感じることもありません。ところが、講座では授業で頭に詰め込んだ知識が目の前の実物とリンクする。これにはなんと表現のできない高揚感を覚えました。この他、授業では扱われなかったニシキウツギの話や、コウゾの話などためになる話もありました。これらは事前の学習がなかったため、知識とリンクした実感には至らなかったのですが、自然の面白さや不思議を肌で感じ取ることができました。将来、僕は教員として子どもたちに理科を教えたいと考えています。この観察会で感じることでできた実感を、子どもたちにも伝えていきたいと思いました。

今回は春に開催された講座でしたが、秋にも同様の講座があれば、春と秋による違いを考えたり、実感したりすることができるので、よい勉強になると思います。この講座に参加して植物や昆虫に対して興味が深まったので、今後、個人で調べるなどして、将来につなげていきたいと思っています。

A 類理科1年 遠山康太

「学芸の森探訪」に参加して

5月19日（土）お天気に恵まれた中、午後1時から観察会が行われました。

イイギリには雄株と雌株があり花粉が4kmも飛ぶお話、次にメタセコイアは戦後アメリカからもたらされ、60年以上経ち大木になっていること。メタセコイアのことは遠い昔、中学生だった頃、聞いたことがあるのですが、改めて興味を持って先生のお話



を伺いました。

白い可愛い花が咲いているカナメモチ、家の近くの垣根でも白い花が咲いていますが、こんなに大きなカナメモチを見たのは初めてです。春先、葉が赤くなるベニカナメモチも良く見かけます。レッド・ロビン、バラ科だそうです。ベニカナメモチは枯れて葉が空き空きになっているのを見かけます。同じ種類なのか疑問がわきましたが、質問しそびれました。

その後、カメムシを見ました。カメムシは我が家の庭、あるいは部屋の中に入り、時々嫌な臭いを振りかけ、大嫌いなのですが、脱皮して間もない緑色の美しいカメムシは、触ってもいやな臭いがないことを初めて知りました。種類も沢山あるんですね。

70年近く生きてきて、ちょっと大げさですが新しい発見があることに我ながら驚きました。同時に、今まで知らなかったことを恥ずかしく思いました。

今回の観察会は、学芸大学の学生さんへの支援メニューと生物科同窓会の催しを小金井市民へ参加を呼びかけて下さったものですが、初めて参加して学芸大学には本当に貴重な緑があることを実感しました。

昆虫について説明された青木先生、植物について説明された真山先生、両先生の説明、お話はとても楽しく何十年前の学生に戻った気分でした。

参加させていただいたこと、心から感謝いたします。



す。また、私が所属している「小金井市環境市民会議」の小金井市の緑調査にもこの観察会の経験が生かせないものかと考えています。

小金井市中町(小金井市環境市民会議会員)
柏原 君枝

◆大学での出来事

生物学関連の現教員について

本年度は人事面で少なからず変化がありました。時系列で述べますと、平成23年10月、堂園いくみ先生が環境科学分野に准教授として着任されました。所属分野は環境科学ですが生物学教室所属でありますので生物科学の卒研指導もご担当いただきます。先生の御専門は植物進化生態学です。本年度、生物科同窓会の企画講演会(「花と昆虫の織りなす世界」)にて、植物と昆虫の相互関係や花の進化について最近のご研究を交えてのお話しが聞けると思いますので奮ってご参加ください。

平成24年3月、環境科学分野所属で環境教育教室の小川 潔先生が定年退職されました。先生は学部環境教育専攻と、大学院の総合教育開発専攻(環境教育コース)および理科教育専攻(生命科学分野)を担当され、生物科学の卒研もご指導いただきました。自然保護運動および自然観察会を中心とする環境教育と生態・自然史研究の両分野で活躍され、現在も本学の特任教授として講義を担当されておられます。

平成24年3月、高森久樹先生が、生命科学分野から理科教員高度支援センター(2010年4月設立)へ准教授として移られました。現職教員研修とその支援に関わるお仕事でお忙しい日々を送られています。生物学教室所属に変わりはないため引き続き生物科学の卒論指導をご担当いただいております。なお同センターでは昨年に引き続き犀川政稔先生が特任教授として研修指導にあたられています。

平成24年3月、真山茂樹先生が教授に昇格されました。現在は、研究はもとより生命科学分野主任、生物学教室主任として分野・教室の運営面でも活躍されておられます。

現在、生命科学分野ではお二人の先生が附属の校長を兼任されています。原田和雄先生は平成24年4月より附属高等学校の校長となられ、お忙しい日々を送られています。飯田秀利先生は附属小金井小学校の校長として今年2期目を迎えられるご活躍中です。

卒業論文発表会・修士論文審査会(公開)のお知らせ

平成24年度の卒業論文発表会は2013年2月2日(土)、3日(日)午前9時から行われます。また2月3日(日)午

後1時より修士論文審査会を行います。公開審査ですのでどなたでも参加できます。これらの発表会場はN411教室を予定しています。例年より少し早目の発表会となりますが、後輩達の研究成果を是非ご覧ください。研究室ごとの卒論発表時間等の詳細、場所の変更等がある場合は、来年1月に生物科同窓会のホームページでお知らせいたします。

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~biology/seibutsuka/dosokai.htm>

◆会費納入のお願い

平成25年度～28年度の会費を収めていただく時期になりました。同封の郵便振替用紙をご利用の上、4年分の会費として2500円をご送金ください。なお、郵便振替用紙は4年に1回同封しています。

口座番号：00170-1-21830

加入者名：東京学芸大学生物科同窓会

電話/FAX 042-329-7521 (庶務:吉野)

E-mail:mayama@u-gakugei.ac.jp (会計:真山)

◆編集後記

本誌の編集には毎年多くの方々にご協力、ご援助を頂き、大変感謝しております。

今回もお忙しい中、生命分野主任真山先生には巻頭言を頂きました。堂園先生には講演会講師をお引き受け頂きました。また、Ferjani Ali 先生には、植物生理・遺伝に自信のない編集委員が作成した昨年の講演報告を校閲並びに写真の提供をして頂きました。有難うございました。

今年の編集は今までに増してドタバタしてしまいました。紙面同窓会の原稿依頼、集まった原稿の整理までは良かったのですが、大学の先生方の原稿をメールで受け取った後整理を忘れ、編集に無駄な時間を費やすことになってしまいました。真山茂樹先生、岡崎恵視会長、橋本健一副会長には大変ご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

私事で昨年と違うところは、7月から月2回～4回の夜間採集が入った事ですが、その疲れからなのか齢のせいなのか考えていましたが、その両方なのかもしれません。まだまだ呆ける歳ではないと思いましたが、思いと現実との乖離が大きくなって来たのではと事実認識をし、脳の調整をしなくてはならないと反省しております。

(編集委員 青木 良)